

コミュニティ指向の若手起業家の育成

大野邦夫*, 西口美津子**, 渡部美紀子***

*職業能力開発総合大学校就職支援センター

**福島工業高等専門学校コミュニケーション情報学科

***千葉商科大学会計専門大学院会計ファイナンス研究科

Email * k-ohno@uitech.ac.jp, **nishiguchi@fukushima-nct.ac.jp, ***mwatabe@cuc.ac.jp

1. はじめに

少子高齢化、産業構造の変化、製造拠点の海外移転、省エネ省資源、国家財政の赤字などの問題を抱え、日本社会は変革を迫られている。これら問題の解決には経済成長が必要と考えられるが、その見通しは明確ではない。この状況は先進国に共通な構造的な不況であり、この問題の一般論的な解決方法は不明確である。一般論としての解決法が期待できないのであれば、特殊解としての個別の解に挑戦していかざるを得ないであろう。そのような特殊解を創造し得る人材の育成が最も期待できる解決法ではないかと考え、そのための要件、手法などを検討している。

以上のような問題を解決し得る人材の要件については既に部分的に検討を試みている。省資源、省エネルギーの問題については、画像電子学会[1]、情報処理学会[2]の研究報告に基づき八ノイ工科大学で開催されたエコマテリアル国際会議で発表した[3]。地域コミュニティ再生の観点での人材育成については情報処理学会[4]で報告した。一応の結論としては、地域サービスにICTを活用する個別分野のスペシャリストと地域コミュニティを指向して活動する挑戦的な精神を持ったジェネラリストが必要であり、さらにエドガーシャインのキャリアアンカーとしては、TF: Technical/Functional competence, AU: Autonomy/Independence, EC: Entrepreneurial Creativity, SV: Service/Dedication to a cause, CH: Pure Challengeが適合することを述べた。

人材育成として特に検討を要するのは、挑戦的なジェネラリストである。個別分野のスペシャリストの育成は、今日の高等教育機関の専門課程がその目的のために存在し、その課程における教育・訓練の問題に還元されると思われる。他方、挑戦的なジェネラリストに関しては、一般論を語るのは難しく、歴史的な人物の分析を試みている。挑戦的なジェネラリストの例としては、社会を変革した人物を採り上げて共通のスキルの抽出を試みた。そのような人物の例として、米国の独立戦争に関わりその建国の祖の一人であるベンジャミンフランクリンと、日本の明治維新に関わり近代国家として出発した日本の啓蒙と教育に携わった福澤諭吉をマトリックス履歴書を用いて分析した。その結果、共通のスキルとして、基礎学力、独立心、科学的思考、経済的知識、外国語、執筆力、情報発信力の7項目を抽出した。

さらに明治維新後の日本の女性起業家として、津田英学塾の創設者である津田梅子と滝野川学園の創設者である石井筆子を採り上げ、マトリックス履歴書を用いて分析し

た。その結果、フランクリンと福澤の分析結果の7項目が彼女たちにも当てはまることが判明した。さらにシャインのキャリアアンカーを当てはめると、当初は、TF、AU、EC、CHの挑戦的なジェネラリストの資質にほぼ適合するが、晩年はGM: General Managerial competence、SE: Security/Stability、SV: Service/Dedication to a cause、LS: Lifestyleといった資質に移行することがマトリックス履歴書から読み取れた。

2. 起業家の育成モデル

2.1 起業家に必要とされるスキル

今後のネットワーク社会で起業家人材を育成するにはどうすれば良いかが課題であるが、この問題は先に述べた社会変革人材の要件、基礎学力、挑戦力、科学的思考、経済的知識、語学力、執筆力、情報発信力がヒントになると思われる。

基礎学力は、受験秀才ではなく、いわゆる地頭の良さに基づく聡明さである。挑戦力は、終身雇用の組織に身を置くのではなく、新たな可能性を求めて挑戦することである。科学的思考は、物理や数学の成績が良いというよりは、事実に基づき論理的に判断し、実践する能力である。経済的知識は、市場や利用者ニーズの認識・把握が起業家にとって重要な資質であることから要求される。顧客に価値を提供する手段の枠組みがビジネスモデルであり、起業における経済的な知識に基づくと言える。

語学力は世界とつながるために必要である。ネットワーク社会はグローバルな枠組みとなるので英語のスキルは必須である。さらに近隣諸国との人事交流やオフショア開発を考えると、その現地の外国語を習得しておくことが期待される。執筆力も多くの人から抜きん出するために必要とされる。技術変化、市場変化に追随する俊敏な経営が必要なので、自分で文章を執筆し、情報発信することが要求される。技術力を誇示し市場でのプレゼンスを高めるためにも素人分かりの良い執筆力が必要である。情報発信力は、起業家としては必須の能力である。企業としての価値や優位性のメッセージを市場や公的な場に発信する必要がある。そのための媒体や人脈を確保し拡大していくことが必要である。

以上のスキルをバランス良く持つことが期待されるが、互いに補い合うような仲間起業する方法も考えられる。アップルコンピュータの設立の際のスティーブ・ジョブズとスティーブ・ウォズニアックの例などが仲間を立

ち上げた例として挙げられるかもしれないが、経営的なジョブズと専門技術のウォズニアクという見方をすると必ずしも当てはまらない。共同で企業を立ち上げた例をいくつか見ているが、スキルを分担するというよりは、中心的な起業家の弱点を補うという関係の方が一般的である。

2.2 グローバル人材としての起業家

今後の世界はグローバル社会であり、人・物・カネ・情報が国境を越えて付加価値を生み出すことになる。とは言え、国境を越えても文化の壁が存在する。文化の障壁は、地政学的要因、宗教的要因、歴史的要因などに起因し、文化人類学や社会学を背景とした知識が要求されるが、専門的な知識と言うよりは、一般教養程度の常識に基づく自由な発想であろう。要するにITスキルを背景にした現代版のリベラルアーツと言えるであろう。

グローバル人材として活躍する起業家は、このような文化の障壁に柔軟に対処する必要がある。フランクリンと福澤は、米日における黎明期の異文化交流者であった。津田梅子と石井筆子も、近代国家として日本が誕生した後の異文化交流を経験した女性起業家であった。

異文化交流に長けたグローバル人材の育成法が検討されることが望まれる。多民族国家であれば、生活そのものが異文化交流の学びの場かもしれない。しかし日本のように韓国や中国のような近隣のへの理解すら極めて乏しい環境では異文化交流には意識的な努力が要求される。その習得すべきスキルと起業家としてのスキルの関係が興味ある課題である。

異文化理解に際しては、地政学的要因、宗教的要因などに比べ、歴史的要因の情報は共有され易いと思われる。人類の進化は、多くの地域、国家や民族にとって昔から興味あるテーマであり、多くの宗教はその疑問に答える試みであったと言える。科学的な研究を通じて、ダーウィンの進化論が受け入れられた結果、人類はほ乳類のホモサピエンスとしてアフリカで発生し、世界中に広まったことが判明した。今後人類がどのようになるかは興味ある課題であるが、その予測のためには歴史を学ぶ必要がある。未来は過去の延長として推理する以外に方法は無いと思われるからである。

国家や民族を越えた普遍的な歴史の把握を試みた最初の人物はヘーゲルであった。彼は歴史哲学を著し、歴史というものが人類における理性の進展を法則にして進化してきたことを提唱した。ヘーゲルの歴史観に対して、階級という概念を取り入れ、人類の歴史を提示したのがマルクスである。マルクスの唯物史観は、技術の進歩が生産力を向上させ、それが生産関係としての経済的枠組みを規定するという思想であった。マルクスは生産関係が規定する資本主義制度の枠組みを悲観的に捉え革命による社会主義への変革を予測した。他方、資本主義による経済成長の枠組みで歴史を捉えたのは、W・W・ロストウであった[5]。ロストウは、近代国家における工業化プロセスを経済的な離陸という概念でモデル化し、非西欧国家で最初に離陸した国家として日本を挙げている。このモデルは、発展途上国の工業化を測るための確かな手法である。

デイヴィッド・リスマンは工業化を通じた社会変化を、その社会を構成する人々の性格の変化としてモデル化した[6]。リスマンは工業化プロセスを近代国家が必然的に辿る普遍的な変化と捉え、それ以前の社会的性格を伝

統指向、工業化が進行中の社会的性格を内部指向、工業化後の社会的性格を他人指向と位置付けた。本稿では起業家をリスマンの社会的性格の概念を用いて分析する。

2.3 キャリアアンカー

キャリア・アンカーについては本報告の冒頭でも簡単に紹介したが、MITスローンスクールのエドガー・シャインによって提案された概念であり、個人が自分の職業を選択する際に、その背景となるモチベーションを分類したものである。これは表1に示す8つカテゴリーに大別され、一般の人はそのいずれかに当てはまることが知られている。キャリアを決定するにあたって、何かを犠牲にせねばならない場合に、どうしても諦めることができないような能力・動機・価値観であると言われる。

表1における奇数番号のTF, AU, EU, CHが挑戦的・改革的な価値観であるのに対して、偶数番号のGM, SE, SV, LSは管理的・保守的な価値観である。先に述べた社会変革者のスキルの多くは、奇数番号目の挑戦的・改革的な価値観に対応する。すなわち、基礎学力(TF)、独立精神(AU, EC)、科学的思考(TF, CH)、経済的知識(TF, GM, AU, SV)、語学力(TF)、執筆力(TF)、情報発信力(TF)となるように思う。社会を変革することを志すのであるから挑戦的・改革的で当然である。

表1 キャリア・アンカーの8つのカテゴリー

No	名称	概要
1	TF: 専門的・職能別能力 (Technical/Functional)	専門領域について挑戦しつづけることに生きがいを感じる。
2	GM: 経営管理能力 (General Managerial)	組織の中で高い地位につき、経営管理能力を発揮する。
3	AU: 自立・独立 (Autonomy/Independence)	自営業や自由業等、自立性の高い職務を選ぶ。
4	SE: 保障・安定 (Security/Stability)	雇用の安定や職務の勤続等、常に安定を志向する。
5	EC: 起業家的創造性 (Entrepreneurial Creativity)	失敗にもめげずに組織や企業を創造する。
6	SV: 奉仕・社会貢献 (Service/Dedication)	世の中を良くすること、環境問題等に価値を見出す。
7	CH: 純粹挑戦 (Pure Challenge)	困難を乗り越え挑戦したい。
8	LS: 生活様式 (Lifestyle)	家族にも配慮し統合的にキャリアを構築して行く。

2.4 起業家育成のパターン

ベンジャミン・フランクリン、福澤諭吉、津田梅子、石井筆子の活動を顧みると、ほぼ下記のような経過をたどっている。

- (1) 当初は専門的能力を培う (TF)
- (2) 専門的能力に基づき自分の天職やライフワークとしての目標を決め挑戦する (CH)
- (3) 挑戦した目標を実践を通じて具体化し起業的な取り組みとして企画・行動する (EC)

- (4) 具体的に事業を起こし運営が軌道に乗った後は安定した経営を心掛ける (GM)
- (5) 好調な運営が続けば、利潤追求だけではなく、社会的な貢献を目指す (SV)

成功して社会に貢献する起業家は、概略以上のような経緯を辿るように思われるので、今後のネットワーク社会でも参考になると思われる。以上をまとめると、図1のようなモデルが想定される。

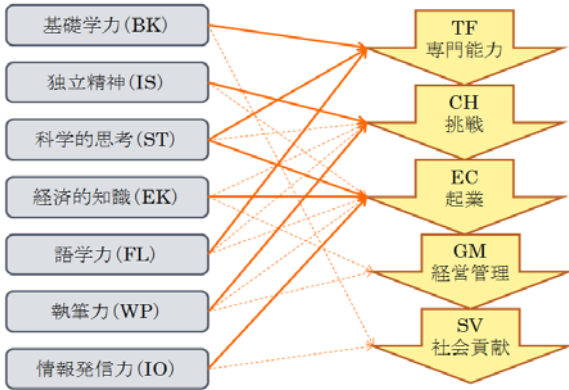


図1 起業家育成モデル

3. 孤独な群衆における自律型人材

3.1 D・リースマンの孤独な群衆のモデル

デイヴィッド・リースマンの孤独な群衆については先に簡単に触れたがその趣旨を要約すると次の通りである。人間の社会は大雑把に見ると、工業化プロセスを境界にして3種類の社会に大別され、そこで見られる社会的な性格が普遍的に表れる。工業化以前は伝統指向、工業化途上は内部指向、工業化後は他人指向という性格に代表されるのである。

伝統指向が出現するのは、工業化以前の社会で、人口構成は多産多死のピラミッド型で人口は安定している。そのような時代は、情報伝達は主に口承によりなされ、人々の性格は伝統的な宗教により影響される。その後工業化が始まると、医療の発達で人々は長寿になる。その結果、人口構成は多産少死となり、それに伴い人口は増加する。そのような状況では、増加した人口を養うための新規産業が工業化分野で展開し、旧弊に捉われない挑戦的な性格が社会的性格となる。このような性格は内部指向と呼ばれ、自己の信念を貫くことが特徴で、ジャイロスコープに譬えられる。

さらに社会が発展し生活水準が向上すると人々は子供を沢山産まなくなり、少産少死の成熟社会となる。そのような社会は、工業化後社会 (PostIndustrialized Society) と呼ばれる。リースマンは言及していないが今日的には情報化社会と言えるであろう。テレビ放送が普及し、人々はテレビのニュースや番組から情報を得、流行を作り出す宣伝広告にも敏感になる。このような状況で、人々はマスメディアや仲間集団からの情報に敏感に反応し、自己の内部ではなく、外部の他人やマスメディアに依存する性格となる。他人指向におけるこのような性格は、内部指向のジャイロスコープに対してレーダーに譬えられる。以上をまとめると図2のように示される。

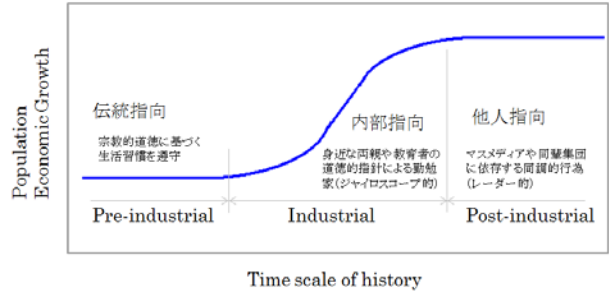


図2 孤独な群衆における社会的性格

3.2 適応型・アノミー型・自律型

歴史的な経緯を踏まえた伝統指向、内部指向、他人指向という社会的なカテゴリに対して、所属集団や組織への適応性に応じた社会的性格というものも考えられる。リースマンはこの性格を、適応型、アノミー型、自律型というカテゴリで分類した。この社会的性格は時代とは無関係に存在する。

適応型は、所属する集団や組織に適応する性格で、単に適用可能な性格から積極的に適応する性格まで幅がある。一般の社会的に適応している人々の多くはこの性格に属する。アノミー型は、所属する集団や組織に適応出来ない性格の持ち主で、精神異常と見なされる人々や反社会的な行動を取りかねない人々である。自律型は、所属する集団や組織に適応してはいるが、問題を感じて批判的な視点を持つ人々である。社会の改革はこのような人々によって推進されるとリースマンは指摘する。

3.3 群衆の顔

リースマンは「孤独な群衆」の姉妹編として「群衆の顔」という著書を出版している[7][8]。この書籍は、「孤独な群衆」による社会的性格の2つの軸に基づき、多様なアメリカ人を分析しカテゴライズした。

本研究から見て特に興味深いのは、職業訓練施設における育成途上の人材の分析である。ニューヨーク州ハーレムの職業訓練校では、黒人の訓練生が以前の生活習慣を保持している状況を把握し、伝統指向として位置付けている。バーモント州ランパート職業高校では、ニューイングランドのプロテスタント的開拓者精神が生きており、内部指向として位置付けている。ロスアンゼルス郊外のサン・ガーディノの高校は、中産階級としての仕事観に基づく教育がなされており、他人指向として位置付けられている。

職業高校に通う学生達のインタビューを通じて、1950年代の米国に残存する多様な職業意識が提示されている。リースマンは、一般の公的教育や大学の高等教育よりも職業教育が社会を反映すると考え、職業訓練校を重点に分析したと思われるが、当時の米国の他人指向社会にも伝統指向、内部指向が存在することを示していた。

3.4 自律型人材育成の重要性

以上の職業訓練施設のインタビュー事例を含む分析を通じた孤独な群衆における社会的性格のパラダイムをまとめると表2のようになる。

適応型の性格は、一般に自らが置かれた世俗の権威や権力を含む環境に従順に振る舞う。それは生物が自分の生存のために環境に適応することの人間版と言えるであろう。しかし何らかの理由でその環境に変化が生じた場合、人間

は新たな環境への適応を要求される。過去の環境に過剰に適応した人間は、新たな環境への適応は却って困難になる。

自律型の性格は、そのような変化の可能性を把握し、それに対処する資質である。異文化交流者、起業家ともに社会変化、環境変化に対する対応スキルを持つ自律型の性格の人間に対応付けられる。フランクリンと福澤は、伝統指向における自律型人材であり、津田梅子と石井筆子は内部指向における自律型人材である。

表2 社会的性格の対応マップ

	伝統指向	内部指向	他人指向
適応型	宗教的道德に基づく生活習慣を遵守	身近な両親や教育者の道徳的指針による勤勉家（ジャイロスコープ的）	マスメディアや同輩集団に依存する同調的行為（レーダー的）
アノミー型	伝統的な生活習慣に不適応な問題児	勤勉文化についていけないなまけ者の不適応者	同輩集団に仲間外れにされる落ちこぼれの脱落者
自律型	従来の伝統や習慣を批判する社会改革者（フランクリン・福澤）	既存の忠誠・勤勉な組織への批判からの自立性を主張する改革者（津田・石井）	マスメディアや同輩集団の圧力に問題を感じ、新たな社会を指向する改革者（育成対象人材）
備考	イスラム、ラテンアメリカ、アフリカ	東南アジア、BRICs	欧米、日本

4. 起業家に要求されるスキル

4.1 工業化社会における自律型人材

自律型の起業家の育成が重要な課題であることが推察されるが、内部指向と他人指向との差異について把握する必要があると思われる。見方を変えると工業化時代と工業化後の時代の差異である。工業化後の時代とは、リースマンが孤独な群衆を記述した時点であれば、マスメディアが発展し始めた米国の社会であるが、現状の日本であればインターネットが発達した情報化社会ということになる。

工業化社会における起業家人材の事例は欧米や日本において幅広く存在する。中には政治権力と結びついて軍需産業の育成などに貢献した人材もいるが、このような人材は社会的な起業家としては反面教師として分析すべきであろう。軍需産業の育成が起業家として好ましくないといへば言えないであろうが、好ましいとは言えない。権力に結びついた起業家は、基本的には適応型として分類される。

4.2 工業化社会から情報化社会へ

情報化社会における社会的起業家は、工業化社会に比べると日本では出現していないように思われる。翻って世界を見ると、スティーブ・ジョブズ、ビル・ゲイツ、セルゲイ・ブリン、ラリー・ページと言った情報ネットワーク業界の巨人が出現している。その背景は米国社会における情

報化社会の到来の早さにある。すなわち米国においては、製造業を中心とする大企業は製品価格、品質、生産性などで日本やドイツに追い上げられ、衰退しつつあった。それへの対処がレーガノミックスによる規制緩和であり、シリコンバレーにおける情報通信分野を中心とする新規事業の創出を通じた米国のお家芸と言っても過言ではない。

その結果、優秀な人材がトランジスタの発明や情報理論で名をなしたベル研究所のような大企業の研究所からシリコンバレーのベンチャー企業へと移行すると共に、IT活用関連分野では市場ニーズに実時間で的確に対応する企業が生き残るようになったと言える。工業化時代の一括大量生産で高品質低価格の製品を製造販売するビジネスは、情報化時代には適合できなくなったと言える。

4.3 起業のリアル

情報化社会における起業家の事例として、興味深い書籍が存在する。プレジデント社の「起業のリアル」である[9]。この本はつっこみの名人と16人の若手起業家との対話であり、多様な人材をインタビューしているので興味深い。

表3は、紹介されている起業家の事業領域を示す。電動バイクを除くとサービス業が殆どで、設備を持ち大量生産するような工業化時代の製造業的な起業とはかなり異なることが分かる。図3はフローレンス代表の駒崎博樹氏のマトリックス履歴書である。

表3 起業のリアルにおける企業分野

氏名	所属	企業分野
森川亮	LINE社長	SNS
前澤友作	スタートトゥデイ社長	アパレル専門店
猪子寿之	チームラボ代表	最先端コンテンツ
出雲充	ユーグレナ社長	高栄養食料
駒崎弘樹	フローレンス代表	病児保育
山口絵理子	マザーハウス社長	アパレル・バッグ
税所篤快	e-エデュケーション代表	途上国教育支援
岩瀬大輔	ライフネット生命社長	生命保険
村上太一	リブセンス社長	求人広告
徳重徹	テラモーターズ社長	電動バイク
岡崎富夢	innovation社長	木造屋上庭園
慎泰俊	リビング・イン・ピース代表	マイクロファイナンス
松田悠介	ティーチフォーギャパン代表	教育学習経営
太田彩子	ペレフェクト代表	女子営業教育
守安功	DeNA社長	ゲーム、SNS
藤田晋	サイバーエージェント社長	広告代理業務

1979～1999	2003	2005	2010	2012
	24	26	31	33
東京都江東区生まれ 高校時代に米国留学 ホストファミリー	米国文化を知る 社会問題に関心 母親の話で立上がる	米国のNPOに学ぶ	DISより解決を	多角的所属の個人 寄付税制改革
	慶応総合政策学部 学生ITベンチャー 病児保育問題に関心	NPOの経営スキル やりたいことでない NPO事業化	政治家への訴求 村木厚子さんの支援	
		フローレンスProj NPO設立代表理事 訪問共済型病児保育	厚労省に働きかけ	
			おうち保育園開園 法規制への取組 NewsWeekで選出	地味なアプローチ 拍手無き勝利を 業界発展の取組
				日本病児保育協会 小規模保育協議会

図3 駒崎博樹のマトリックス履歴書

駒崎の活動は、社会起業家という新概念による起業で、もの作りの工業化社会では存在しなかった領域の開拓である。彼は高校時代に米国に留学し、その経験を生かして大学3年の時にITベンチャーを立ち上げてそこそこの事業経験をしたが、それは自分が本当にやりたい仕事ではないと感じた。自分が本当にやりたい仕事は、社会をよりよくすることであると考え、病児保育の事業化を検討した。米国のNPOの取り組みを参考に、それを日本でも普及させる方針を立て、企業的な活動の枠組みで小規模保育の効率的な運営を試みた。その過程では制度的な問題もあり、その問題の解決には政治家への働きかけも行った。

大言壮語で天下国家を論じたり、島耕作的な企業人間として成功するよりは、地道に社会に貢献する個人になるべきではないか。そのためには、多角的所属の個人という考え方が重要になるとのこと。彼の発想はまさに情報化時代の自律型人材である。

4.4 情報化社会における自律型人材

「企業のリアル」に登場する自律型の若い起業家たちは、大量生産文化の工業化社会における自律型の起業家とは異質な面を持っている。その特徴の一つは、フットワークが軽さである。米国のNPOのやり方が良ければさっさと真似てしまうのである。

情報化社会における自律型人材の起業家の特徴は、利潤追求だけではなく複眼的な視点で社会を注目し、自分の生き甲斐として社会に貢献することを目指している点が挙げられる。「企業のリアル」における山口絵理子（マザーハウス社長）、税所篤快（e-エデュケーション代表）、徳重徹（テラモーターズ社長）、慎泰俊（リビング・イン・ピース代表）、は開発途上国でのビジネスを指向しているが、そこには利益を上げるだけでなく、途上国の人たちと連帯して新しい社会の構築を目指す意気込みが感じられる。他の起業家たちも、世の主流を追従するのではなく、個性的なアイデアで自己の価値観を示しつつ社会に貢献する道を歩んでいると感じられる。このあたりが、単なる金儲けや立身出世に捕らわれて活動する適応型の人材とは大きく異なるのである。

5. 女性起業家の事例紹介

5.1 インタビューによる取材

地域コミュニティに貢献している女性起業家、およびそのような起業家に関係すると思われる人材を対象に私どもはインタビューを行い、現場の問題を発掘すると同時に、それらを今後の教育などに生かすことを試みている。ここでは、表4に示す4人の事例を簡単に紹介する。

表4 インタビューした人々

対象者	現職	起業分野
Aさん	起業家	コーヒー・紅茶のフェアトレード
Bさん	社労士	企業コンサルタント
Cさん	イラスト画家	出版業界
Dさん	E/TP研修生	センサー活用コンテンツサービス

5.2 フェアトレードによるコーヒー・紅茶販売

Aさんは、6年前にフェアトレードの法人“ethicafe”を起業した。主な事業は、ネットショップによるコーヒー豆の販売である。結婚式の引出物としての売上も多いとのこと。ガテマラ、ルワンダ、コロンビア、メキシコなどの発展途上国のコーヒー豆やその粉をパッケージにして美しく包装して販売している。この事業における一つの特徴はフェアトレードである。フェアトレードは、文字通り公正な貿易を意味する。先進国と途上国との間の貿易は、とかく先進国に優位な形式で行われてしまいがちである。それを公正・公平な取引として実現し事業にすることをポリシーとしている。言い方を変えると不幸な人を生み出さない事業の推進である。ethicafeという企業名はそのような思想と方針に基づくコーヒー販売事業に由来している。彼女がこの事業を思い立ったのは、小学生のころにテレビで難民キャンプの映像を見て、途上国問題に関心を持つことに端を発するとのこと。そのような経緯から中学生の時に、社会科の自由課題で、国連の活動についてレポートをまとめた。その後、福島高専に入学し、海外に対する興味からコミュニケーション情報学科を選択した。高専2年の時に、英会話スクールのチラシを見てカナダに語学留学をした。9か月の留学生活の後、1学年下に復籍して3年次までを終了した。その後英国に渡航し、ウェールズの語学学校で8か月学んだ後に、イングランド・イーストアングリ

ア大学に入学し、国際開発学部で3年間高等教育を受けている。教員の半数が1年の大半を途上国での研究にあてている環境で、ご自身もペルーで4か月のNGO体験をしている。卒業して帰国後、いわき市に本社を置く車載情報機器のメーカーに就職し、海外向けのカタログ作成、モーターショーのイベント、ウェブサイト制作など様々な業務に携わり最新技術に関わるビジネスを経験した。仕事自体にやりがいはあるが企業組織の閉塞感から、大学時代に経験した途上国にかかわる仕事をしたいとのことでフェアトレードを方針とするethicafeを立ち上げたとのことである。フェアトレードの仕事をするためには、国際認証が必要であり、法人格が必要になる。そのために書類を作り、実家を事務所にして開業した。いわき市の商工会議所で、いわき駅前での再開発を担当しているラトブ事務所のベンチャー企業支援を知り応募したところ、面接の後に採択され、再開発ビルのラトブ内にオフィスを開業した。新規事業の立ち上げの後、事業を継続するために、商品製造、営業、経理といった必要な業務を全てこなし、スキルを身につけたとのことである。商品の製造作業のためにはコーヒー豆から粉をひき、それをパッケージングして100個単位で箱詰め・包装を行う。経理の仕事としては、コーヒー豆やその他必要な資材の発注、顧客からの受注に伴う帳簿の整理、領収書の発行、決算などが呈上業務として必要とされる。営業としては、Webサイトの制作・更新の他、知名度を上げるためのイベントへの出店に心掛けているとのこと。今後は、本社はいわき市に置きながら、ネットを通じて全国にフェアトレードをアピールして行きたいとのことである。

5.3 働く人の立場に立つ社労士事業

Bさんも福島高専の卒業生である。在学中は心理学に興味を持つと共に、非正規雇用や若年フリータの問題に関心を持った。卒業後も心理学関係の仕事とのことである。卒業後は雇用や福祉の専門家を目指し、通信制の福祉大学に通ったが挫折して中退し、飲食店や小売りのパートをしながら以前関心を持った雇用問題を自ら体験し、関心を深めた。やがて地元の中堅企業に購買担当として就職し、納入業者の管理や価格交渉を務める傍ら、間接部門のスキルの体系化、部内研修の企画や運営を担当した。その後、社会保険労務士（社労士）の資格を取るべく独学で試験に合格し、その後社労士開業ゼミに通って開業した。さらにこの資格を通じてハローワークで助成金の申請をアドバイスする仕事に携わる傍ら2年前に”Rinen“という自分の企業を立ち上げた。現在は労基署の労働相談員を兼務しながら複数の企業でコンサルティングの仕事をこなしている。企業での社労士の仕事は、労資関係のさまざまな問題に対して、法的・制度的なアドバイスを行い、建設的な提案をすることである。企業側の立場を重視して仕事をする社労士が多いのはやむを得ないと思われるが、Bさんは働く人の立場を重視しており面談する人からもそのように言われて感謝されるとのことである。彼女の場合、高専で心理学に興味を持ち働く人たちのモチベーションに関心を持ったことに端を発して、この分野が一貫したライフワークとなっている。社労士になってからも交流分析（TA: Transactional Analysis）を学びTAインストラクターの資格を取り、その分野でも専門家になって働く人との相談に生かしているとのことである。

5.4 楽しさと明るさを売り物にするイラストレーター事業

Cさんも福島高専の卒業生である。小さい頃から絵を描き本を読むのが好きだったとのこと。高校は新設されたばかりの福島高専コミュニケーション情報学科を選択し一期生らしく広く浅くさまざまな授業を受けた。出版社での仕事を希望して就職活動をしたが失敗した。高専の先生から出版業に携わりたいなら即戦力となるスキルを身につけて自分を売り込む方がよいとのアドバイスを受け、短期専門学校に進学し、業界で使われているアドビ社のツールに習熟した。その後そのスキルを生かせる出版関係のコンテンツ制作企業に就職し、定期刊行のパズル専門誌、子供向けの学習用書籍などの編集を担当した。しかしその後、自分にとって仕事とは何か、仕事を通じて社会とどう関わるかを考えるようになったとのこと。専門のイラストレーターが開く私塾に通い、PCを使わないでデッサンを描くなど描画の基礎を学んだ。さらに自分の適性を把握するために、業務の中で何をしているときが一番楽しいか考えた結果、イラストレーターへの発注（アイデア出しなど）の専門職の可能性に関する自分の適性に気づいた。そのようなスキルの習得のために、夜間の美術系学校「セツモード・セミナー」に通い始めると共に、プロのイラストレーターを目指して思い切って退社してしまった。その後はイラストの勉強を確保するために定時退社できる派遣の仕事に就いて腕を磨いた。育児雑誌のカットの仕事を担当したが、オリジナルなアイデアとして、切り絵の方法を思いつき試してみたところ手ごたえを感じた。それまで芸術性のあるもの、他者に評価されるものを制作しなければいけないと思っていたのが「見ていて楽しく、明るい気持ちになるもの」「誰でもわかりやすいもの」を作ろうと思うようになった。そのような経緯を通じて確実に仕事になる分野、自分のセールスポイントがわかるようになってきたとのこと。さらに自分の過去の仕事を参照した未営業先のクライアントからも依頼がくるようになった。5年間勤めた派遣先を契約満了のため退社後、定時退社できる医療系出版社の編集部に勤務している。その傍ら独自にイラストの営業を重点的に行い、ムックの表紙、雑誌の特集など任される仕事の規模が少しずつ大きくなってきて現在に至っているとのことである。

5.5 日本法人設立を目指すハンガリー起業家

Dさんは、ITwareというハンガリー企業の若手幹部で、現在ETP（EU Executive Training Program）と呼ばれる早稲田大学でEUの支援によるビジネスコースに在学し、日本法人を設立するために、日本での商習慣や文化、さらに具体的な市場や技術について学んでいる。企業が文化の異なる異国に進出するということは、同一文化の国内での起業とは異なる問題解決を要求される。国内での起業は、製品技術と市場を分析し、会計学や経営学の手法を駆使してビジネスモデルを構築すれば良いが海外で事業展開するとなると解決せねばならない事項が山積する。先ず製品のローカライゼーションが必要である。さらに営業ツール、マニュアル等のドキュメントの翻訳と整備、現地における連携企業との提携、現地人の雇用を含む組織の立ち上げ等の課題が発生する。それに関連して法制度的な問題も考慮せねばならない。グローバル化とは、このような文化的な

差異に基づく組織運営を含めたビジネスモデルの構築を必要とし、起業家としてのDさんはそのような問題に直面せざるを得ない。

ITware社は、APPawareというスマホ向けの画像コンテンツ編集ツールを製品として提供している。APPawareを活用するアプリにはM2M、CRM、自動車位置追跡、医療介護、エデュテインメントなどがあり、今後の展開が期待される。

特にAPPawareの画像コンテンツ編集機能は直感的で興味深い。エディタは既存のコンテンツを取り込み、それらを組み合わせて新たなアプリケーションを構築する機能を提供するが、その操作はまさに図4のように視覚的に紐付けされるのである。先の画像電子学会の年次大会で今後のテクニカルライティングは、ストーリーテリング手法による画像の遷移に関する創造性が重要という報告を行ったが、将にその機能を支援している[10]。



図4 APPawareエディタの紐付け画面

Dさんはハンガリーの大学を卒業し、その後欧州のいくつかの高等教育機関で学んでいるが、バイオ、IT、経営といった多方面のスキルを習得している。APPawareの操作やそのアプリに関しては優れたデモンストレータでありかつマケッターである。日本という異境にあっても好奇心とチャレンジ精神旺盛な起業家である。

6. 考察

6.1 これまでの要約

本報告では、2章でキャリアアンカーの考え方と社会的な起業家に期待される7項目のスキルについて述べ、この両者に基づく起業家育成モデルを提案し図1に示した。

3章では、起業家に要求される社会的性格をD・リースマンの孤独な群衆における分類手法を用いて分析し自律型の性格が対応すると考えた。4章では、情報化社会における他人指向の起業家群像を、「起業のリアル」を用いて概観し、その中の駒崎博樹についてマトリックス履歴書を用いて分析した。5章ではこれまでにインタビューしてきた女性起業家を紹介し、現状の女性起業家についての分析を試みた。

6.2 産業構造の変化と自律型人材としての起業家

リースマンの孤独な群衆における自律型の個人に関する定義は、自分が所属する組織や社会に適応するが、その組織や社会に内在する問題を把握し、その解決を指向する個

人である。別の見方をすると、適応型やアノミー型の個人に比べると、自分の持っている性格と立場の余力を十分に使いこなすことができる。リースマンによると、自律型の個人でも、内部指向と他人指向ではかなり異なることが指摘されている。内部指向における自律型は、その社会における適応型と同様にジャイロスコープによるメタファで象徴される内面化された目標を持っている。適応型との相違は、そのジャイロスコープに対するコントロール能力を有していることであり、組織や社会に対して柔軟に対処することが可能である。他人指向における自律型は、その社会における適応型と同様に、レーダーによるメタファで象徴されるマスメディアや仲間集団からの情報に影響されるが、鋭い感受性により、自分の価値観や進むべき道を選択して行ける個人である[11]。

若手の起業家は、情報化社会としての他人指向における自律型人材として活躍している。「起業のリアル」に登場する彼等彼女らは、工業化社会における業界や組織に依存するような起業家ではなく個人として自分の生き甲斐を実現すると共に、社会に貢献することを志す人物が多いと言えるであろう。

6.3 インタビュー結果の考察

先に研究報告[12][13]や国際会議[14]で紹介したフェアトレード事業を立ち上げた起業家、末永早夏さんは本報告のAさんであるが、まさに情報化社会における自律型人材である。このような起業家が育ってくれば日本の将来も捨てたものではないであろう。

5章で紹介した女性起業家群は、情報化社会における自律型人材である。全員に共通するのは、自己実現のモチベーションである。日本の多くの社会組織には寄らば大樹の陰、長いものには巻かれるという隠然たる文化に支配され、その中であって異色の人物は生きにくいのが実情である。福島高専卒のAさんからCさんまでは、そのような状況に問題を感じそれまでの自分の生き方を顧みつつ新たな人生を挑戦的に選択していった勇敢な人たちである。この決意の場面こそ、適応型と自律型を分ける分水嶺に他ならない。このような分水嶺に立たされた時に、組織に埋没せずに自分の価値観で行動することが可能な何ものかが起業スキルの要件であろう。図1における独立精神、科学的思考などはその要素であろうし、キャリアアンカーにおけるTF、AU、CH、ECもそのモチベーションを与えるものである。

Dさんの場合は日本とハンガリー両国にとって貴重な人材である。ハンガリーはEUの一員ではあるが工業化の途上国である。なおDさんのITware社は最先端の情報関連企業であり、情報化社会の文化を保持している。日本は既にサービス指向の情報化社会であるが、産業界や職業教育分野では「もの作り」への郷愁が強く、組込系に活路を見出している起業家も多い。そのように考えると、ITware社の日本における事業機会に興味深いものがある。

7. おわりに

以上、もの作り産業文化で象徴される工業化社会からマスメディアが支配するサービス顧客指向の情報化社会への移行を背景に後者における社会的起業家人材についての検討を試みた。このような人材としては、D・リースマンが

「孤独な群衆」の中で特徴付けた自律型人材の性格が適合する。具体的には、「起業のリアル」に登場する若手起業家と私どもが独自にインタビューした女性起業家の事例について検討したが、個人として自分の生き甲斐を実現すると共に、社会に貢献することを志す自律型の人物が主流となっていることは明らかである。今後は、このような自律型人材についてより具体的に検討し、起業家人材の育成や教育の具体的方針、カリキュラムなどについて検討していきたいと考えている。

参照情報・文献

- [1] 大野邦夫, 西口美津子; “循環型社会に向けた人材育成とICT技術の活用に関する一考察”, 画像電子学会年次大会一般講演論文 (2013.6)
- [2] 大野邦夫, 西口美津子; “循環型社会に向けた人材育成とICT技術の活用に関する検討”, 情報処理学会研究報告, DD90-3, (2013.7)
- [3] Kunio Ohno, Mitsuko Nishiguchi; “A Study on Human Resource Development for Ecomaterial Recycling Society” Proc. on 11th International Conference on Ecomaterial (ICEM11), P.27, (2013.11)
- [4] 大野邦夫, 西口美津子; “地域コミュニティの再生に貢献する人材育成に関する検討”, 情報処理学会研究報告, DD91-2, (2013.9)
- [5] W・W・ロストウ (木村健康他訳); “経済成長の諸段階”, ダイアモンド社 (1961)
- [6] D・リースマン (加藤秀俊訳); “孤独な群衆”, みすず書房, (1964)
- [7] D・リースマン (國弘正雄・久保昭訳); “群衆の顔(上)”, サイマル出版会 (1968)
- [8] D・リースマン (國弘正雄・久保昭訳); “群衆の顔(下)”, サイマル出版会 (1968)
- [9] 田原総一郎×若手起業家; “起業のリアル”, プレジデント社 (2014)
- [10] 大野邦夫; “画面推移プロセスに基づくスマホ時代のテクニカルライティング技能についての考察”, 2014年度画像電子学会年次大会, R2-1 (2014.6)
- [11] D・リースマン (加藤秀俊訳); “孤独な群衆”, みすず書房, pp.243-256 (1964)
- [12] 大野邦夫, 渡部美紀子, 西口美津子; “ネットワーク社会を目指す起業家人材の育成に関する検討”, 情報処理学会研究報告, DD94-2, (2014.7)
- [13] 大野邦夫, 渡部美紀子, 西口美津子, 末永早夏; “異文化交流スキルを有する女性起業家の育成に関する研究”, 異文化コミュニケーション学会2014年度年次大会研究発表資料, (2014.9)
- [14] Kunio Ohno, Mikiko Watabe, Mitsuko Nishiguchi; “A Study on the Human Resource Development for Entrepreneurs toward Future Network Society”, Proc. The Fourth IIEEJ International Workshop on Image Electronics and Visual Computing (IEVC2014), 1P-12, (2014.10)